

一般演題 (ポスター2)

P26 び慢性胸部異常陰影, MALTリンパ腫, ANCA 陽性の腎サルコイドの1例

○鈴木礼奈¹⁾, 毛利 孝¹⁾, 下瀬川健二²⁾, 伊藤洋信³⁾, 吉田千香¹⁾, 村井智美¹⁾, 相馬 淳⁴⁾

岩手県立中部病院 呼吸器内科¹⁾
岩手県立中部病院 血液内科²⁾
岩手県立中部病院 消化器内科³⁾
岩手県立中央病院 腎臓内科⁴⁾

【症例】68歳, 男性

【主訴】全身倦怠感, 体重減少 (3か月で20kg)

【現病歴】上記検索にて胃MALTリンパ腫発見され, ピロリ菌除菌療法後胸部び慢性異常陰影あり気管支鏡下肺生検施行したところサルコイドの診断となった。腎機能障害, 尿蛋白, 血清ACEとリゾチーム高値, PR3-ANCA 上昇 (49.9U/mL) がみられた。サルコイドーシスの腎障害, Granulomatosis with polyangiitis (GPA), MALTリンパ腫関連腎障害 (パラプロテイン腎症) 等考えられた。腎生検では, 間質に広範な炎症性細胞浸潤と尿管管萎縮がみられ, 所々に肉芽腫病変を形成していた。同部中心ではマクロファージ, 周辺ではCD4陽性細胞が主要構成細胞であった。

糸球体病変, 小細動脈血管炎はみられなかった。サ症による肉芽腫性間質性腎炎と診断。ステロイド剤投与により全身倦怠感と腎機能が改善した。その後胃がんが発見された。

【考察】PR3-ANCA, M蛋白はlow grade B cell lymphoma で陽性となり得る。本症例はGPAによる肉芽腫性間質性腎炎との鑑別も要するなど病態が複雑であった。

P27 当科のサルコイドーシス症例における血清soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) の検討

○石本裕士, 矢寺和博, 花香哲也, 小田桂士, 生越貴明, 迎 寛
産業医科大学医学部 呼吸器内科学

【緒言】血清soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) は, Tリンパ球の活動性を反映しサルコイドーシスにおいても高率に上昇することが知られている。そこで, 当科のサルコイドーシス症例においても血清sIL-2Rを再評価し, 病態との関連を検討することとした。

【対象と方法】当科において2011年1月以降にサルコイドーシスの組織診断基準を満たした53症例 (男性19例, 女性24例, 平均年齢56.7歳) が対象である。診療録レベルの後方視的検討を行った。

【結果】49例において血清sIL-2Rが測定されており, 平均値は963.2 (最低164, 最高3360) U/mlであった。カットオフ値である534U/ml以上を示した症例が38例にのぼり, 有所見率は77.6%となった。一方, 血清angiotensin converting enzyme (ACE) の有所見率は41.5%であった。

【結論】血清sIL-2Rの有所見率は高いことが確認できたが, リン

パ増殖性疾患などを考慮にいれてその活用は慎重に行うべきである。

P28 サルコイドーシスと悪性腫瘍の合併例についての臨床的検討

○村松聡士¹⁾, 玉田 勉¹⁾, 奈良正之²⁾, 村上康司¹⁾, 蒲生俊一¹⁾, 星川 康³⁾, 菊地利明¹⁾, 一ノ瀬正和¹⁾

東北大学大学院 医学系研究科 呼吸器内科学分野¹⁾
東北大学病院 臨床研究推進センター²⁾
東北大学加齢医学研究所 呼吸器外科学分野³⁾

サルコイドーシスは種々の臓器に非乾酪性類上皮肉芽腫を形成する非腫瘍性の全身性疾患である。近年, 新規抗悪性腫瘍薬の使用による予後の延長に加え画像診断の進歩もあり, 悪性腫瘍とサルコイドーシスとの合併例を経験することが増えている。当科サルコイドーシス外来通院中の患者213例中, ①悪性腫瘍の治療経過中にサルコイドーシスと診断された場合, ②サルコイドーシスの経過観察中に悪性腫瘍の診断がついた場合, のそれぞれについて発症頻度やその臨床的特徴について検討した。特に②においては, サルコイドーシス肺野病変の結節影の一部が徐々に増大し, 組織学的検査により診断を得ることができた5例 (サルコイドーシス肺病変増悪が2例, 肺腺癌が2例, 肺扁平上皮癌が1例) についてHRCTによる詳細な検討を加えた。サルコイドーシスと悪性

腫瘍が合併しやすいものかどうか, および悪性腫瘍に対する手術療法や化学療法がサルコイドーシス発症に関連しているのか, 過去の悪性腫瘍合併サルコイドーシスに関する文献的検討も加えて報告する。